

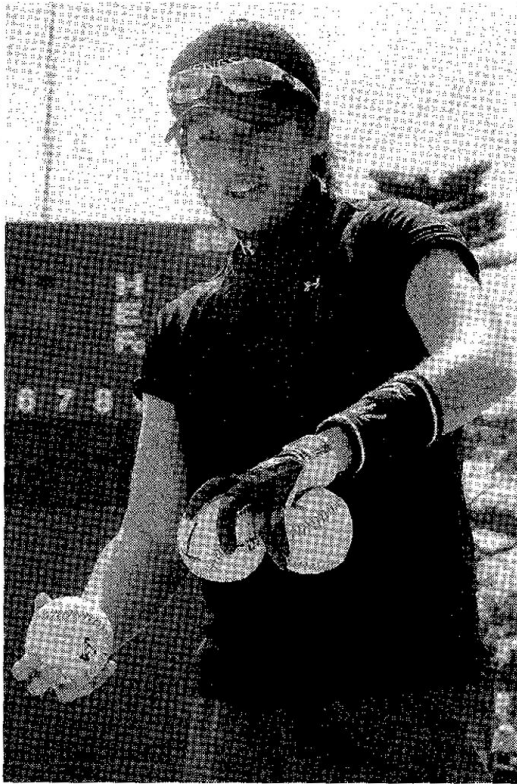
逆境 それでも投げ続ける

五輪とは

上野由岐子

と
高梨沙羅

上



沖縄・北谷町でのチームの合宿でトス打撃を手伝う上野由岐子

夏のような日差しの中で、ソフトボール日本代表のエース、上野由岐子(29)が投げ込んでいる。気温が25度近い沖縄県北谷町。所属するルネサスエレクトロニクス高崎のコーチ兼任選手として、後輩たちに教える姿も目立つ。

13球を投げ抜き、日本中を沸かせた2008年北京五輪の金メダルから4年。ソフトボールは五輪競技から外れ、日本リーグ女子の総有料入場者数は08年シーズンから約3万人減った。日本オリンピック委員会からの選手強化費も3割程度になった。それでも、上野は投げ続けている。

08年から2年連続で全日本総合選手権、国体、日本リーグの3冠を達成。指導者資格を取得し、2年ぶり北京からの2年間は、野手に代表復帰した10年広州アジア大会では金メダルを獲得した。昨年は球速123km/hをマーク。普段は110km/h後半半だ。「調子がいい時は今も速い」と捕手の峰幸代(24)は言う。

淡々と活躍してきたように見える。だがチームのシニアアドバイザー、宇津木妙子(58)は知っている。「北京で上野だけが注目を浴び、上野だけのチームじゃないという選手がいた。上野も完全燃焼し練習に身が入らなかった」。北京からの2年間は、野手

朝日新聞 (2012.2.21 朝刊)

との間に無言の緊張感が漂った。

「吹っ切れたのはアジア大会決勝からでしょう」と宇津木は言う。上野は今、「自分のことはいい。期待してくれる人のために投げる」と話す。

昨年の日本リーグ・プレーオフ決勝、トヨタ自動車戦だった。延長8回に2点をもらいながら、上野は裏にサヨナラ2点本塁打を浴びた。「ああいう形で負けたのは初めて。30周年のソフトボール部と、東日本大地震で被害を受けた会社のために勝ちたかった」。涙が止まらなかった。

宇津木は上野の引退を心配し、「お疲れさん」と携帯メールを送った。翌朝、返信が来た。

「みんなが一生懸命、点を取ってくれたのに、自分の力が足りなかった。来年、絶対頑張ります」

普及すれば 復活するのか



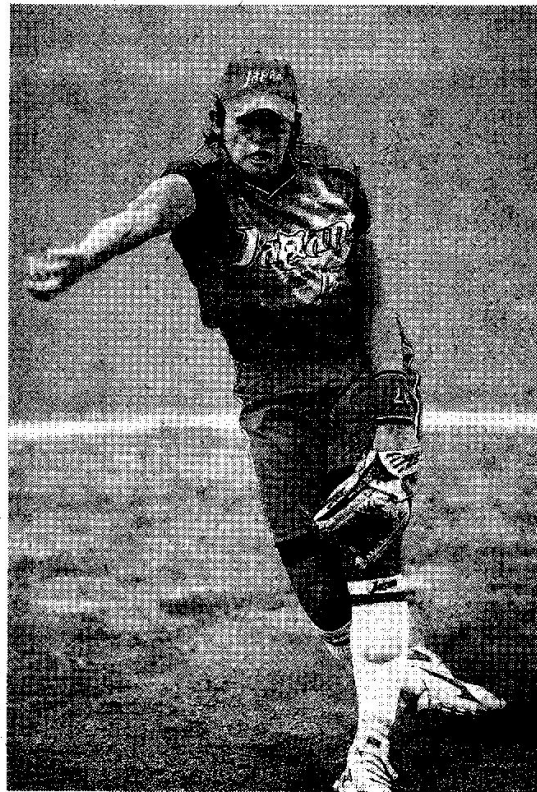
五輪とは

上野由岐子

と

高梨沙羅

中



北京五輪で力投を続けた上野由岐子

決勝で米国と対戦した2008年北京五輪。上野由岐子(29)は、ある思いを胸にマウンドに立った。「ソフトボールは米国だけのスポーツではないと、アピールしたかった」。五輪から外れる理由は米国中心の競技だから、と聞いたから

上野が金メダルを夢見た

前日に2試合を完投し、利き手の右中指の皮がむけた。だが、投げないわけにはいかない。日本代表監督にも知らせなかった。配球については、日本にいたルネサス高崎(当時)監督の宇津木麗華(48)から携帯電話やメールでアドバイスを受けた。米国に勝つため、最善と信じる方法を貰った。

きっかけは、1998年長野冬季五輪。スピードスケート男子5000円で頂点に立った清水宏保(37)にあこがれた。ソフトボールは、96年アトランタ五輪から正式競技となっていた。

今、上野はできるだけ講習会に出かける。00年シドニーで銀、04年アテネで銅と、金にあと一歩届かなかった元日本代表監督の宇津木麗華(58)。主砲として日本を引っ張ってきた中国出身の宇津木麗華。先輩たちから受け継いだ夢と希望

朝日新聞 (2012.2.22 朝刊)

を、子どもたちに伝えた。だからこそ悩みは深い。「普及活動を続けければ、本当に五輪に戻るのか……」

北京の時と違い、どうしようもできないものか、さがつきまとう。「流れに身を任せるだけ。実際、何もなくても五輪から外された。だから、何もなくても五輪に復活するのかも」

少ない20代の日々を望むのほない。「やりきったから。この4年は長かった」

□

■

7月に30歳になる。残り

投げたい 原点は変わらない

朝日新聞
(2012.2.23 朝刊)



今もソフトボール界を引っ張っている上野由枝子

やはり1月、ソフトボールのルネサスエレクトロニクス高崎の新年会があった。「厳しくチームを指導したい」。上野由枝子(29)は決意を述べた。シニアアドバイザーの宇津木妙子(58)は「大きくなった」と感じた。「いろんなことを乗り越えたからでしょう」

国際ソフトボール連盟は野球と単一競技として、東京都が招致を目指す2020年五

輪での復帰を目指す。チーム監督の宇津木麗子(48)は「上野に40歳を超えて投げてほしい」と願う。五輪復帰が決まれば、再び大舞台に立てるからだ。

上野は、先のこととは考えていない。ただ、期待してくれる人がいる限り、投げ続ける。「ソフトボールが好きなんです。子供のころから目立つのは好きじゃなかったけれど、投手をやりたいかった。ソフトボールに出会えて感謝です」

五輪を知らなかった小3で競技を始めた。今も、その時の上野と変わらぬ。

敬称略
この連載は由利靖典と井正基が担当しました